香川景樹の歌論の矛盾に関する問題

高浜　充

香川景樹の歌論については、古来各方面から研究されて、その問題になる点についても、種々論議されてきたのであるが、彼の論説に色々矛盾が見られる点については、未だ必ずしも論じ尽くされたとも思われない。そこで彼の歌論の矛盾性に焦点をあてて、実証的に解明してみたいと思う。

先ず景樹の歌論の矛盾していると言われる点を列挙してみると、

(1) 調の説において、歌の調はその内容に即応して、色々変化あるものでなければならないと主張しているが、又一方では、調は優美で上品な一定の型のものであるべきことを強調している事の矛盾。

(2) 歌の詞は、現代の平語を用うべきことを主張する一方又、俗語平語を斥けている事の矛盾。

(3) 実物実情の端的の感を歌うべきことを主張しているが、自作においては知巧的趣向の歌をも数多く作り、それを自認している事の矛盾。

(4) 以上の事を含めて、理論と実作との一致しない事の矛盾。

⑤ 賀茂真淵の復古思想と万葉主義を攻撃して尚今主義を唱えているが、その実自分は真淵の説を継承しているし、又古今集を尚ぶ点で、真淵と同じような古典準拠主義である事の矛盾。

景樹の歌論は矛盾だらけと言う人もあるが、彼の説の問題になる点を要約すれば、およそ以上のようになるであろう。彼の歌論はこれらの点について、事実矛盾しているものだろうか。それとも仔細に見れば、矛盾していないのではなかろうか。又矛盾しているとすれば、彼はそれに気がついていながら、敢て強弁したのだろうか。或は意識していなかったのだろうか。それらの事は、如何なる点にその原因があるのか。かような問題について、順をおって明きらかにしてみたいと思う。

一

景樹の歌論の中心をなす所の『しらべ』の説について、彼は、『ゆらゆらとしたるが調のととのへるにあらず。せはしきことはせはしく、強きものには強きが、調のととのへるなり。』（桂園遺文）等と度々くり返し述べて、歌の調は表現対象に即応した調でなければならない事を強調しているが、又他の一面に於て、『大やうはみやびかに詠む事にて、みやびと云は品よきにて、上品にいやしからず、如何なる高貴の方のみ前にて調べあげても、恥しからず候やう言ひ下すをよく調ぶると申候也。』（随所師説）等と言って、歌の調は上品で流麗なものでなければならないと、相反する意見を述べている。この矛盾については、従来各方面から指摘されてきた所であるが、先ず彼は調の本質についてどう考えていたかについて、

改めて考えてみようと思う。よく引用される文であるが、

そもそも調は天地に根ざして古今をつらぬき四海にわたりて異類をすぶるものなり（歌学提要）歎辞は自然に出でて、自然は即誠なり。誠ばかり天の下に尊きものなく麗しきものなければ、歌の姿は尊く麗しかるべき事又論なし。（楽不流が詠草に）

うづ高く麗しきは天地の心にてやがて天地の調なり。此調を得たるをよき歌とす。（丸山辰政が詠草に）

彼の言う所は、歌の調は古今東西相通ずるのみならず天地の心に通ずるものである。そうして歌は歎辞が、誠を通じて自然に表れたものであって、之は天地の心に通ずるものであるが、天地の心も誠も尊く麗しいものであるから、歌の調も上品に麗しいものでなければならないと言うのである。彼が天地の心とか誠実とか称したものは、形而上のロゴスのようなものを考えていたものと思われる。天地の心というロゴスが具象化されたものが調である。だから調は古今東西男女のみならず、天地万物に遍在する。而して天地の心も誠実も尊いものだから美しい。天地の心が具象化された調も上品で美しくなければならないと言うのである。併し他面に於て之と相反する意見を述べている事は事実であるが、それには前提がある事に注意しなければならない。

調のうるはしきが宜しく候。しかうるはしきをもととし置きて、あはれにもさやかにもおもしろくも、いかにも物に時にしたがひて有たく候。（正寿尼の詠草に）

右の例によってわかるように、彼は『しかうるはしきを基とし置きて』とはっきり断っているのである。即ち流麗な調の基調の上に於て、各種各様の変化ある調があるべきであると言うのである。上品で麗しいと言うわくの中に於て変化を求めたのである。天地の心が美しいと言う彼の説における美そのものの内容を、優美なもののみに限定した事について、美学的見地からの当否は別として、彼の調の論そのものは一応統一されていて、別に矛盾はないのである。彼自身としても、別に自家撞着を感じていたわけでもなく、自信満々たるものがあったのであろう。

又彼の自作の和歌について見ると、万葉調の歌、古今調の歌、新古今調の歌、俳諧歌、知巧的趣向の歌、口語的発想の歌、新しい素材の歌、新語に工夫した歌、実物実景による実感の歌、清新な内容形式の歌、流麗な調の歌、やや屈折ある調の歌、等と多様な歌風の歌を包含しているのであるが、全般的に古今集的流麗な調に色どられているのであって、その流麗な調の基調の中に於て、色々の変化を見せていると言う事実と照応して考えて見ると、大筋に於ては、彼の理論と実作との間に於ても、甚だしき矛盾があるとは言い得ないであろう。

二

次に景樹の歌の詞の説に関する矛盾について考えてみる。彼は歌学提要に『歌詞といふもの更にあるものにあらず。ただその御代御代の言葉をもて誠実の思をのぶるのみ。さるを後世歌よむには、別に詞づかひあるものと思へるはいたき謬なり。今の世の詞もて耳やすくよみなすこそ専一なるべけれ。』と言って、歌には現代の平語俗語を使用すべき事を説いているが、一方に於ては、随所師説に、

『今の俗言といへばとて、鄙言を云べきにあらず。程につけてよむべき詞なからんや。』等と言って鄙言を斥けている。この事については、夙に業合大枝が文政十一年に新学異見弁に於て、景樹の説を批判している。景樹が新学異見に於て真淵の説を攻撃して、『苟且にも今をすてて古風の文をかくことなかれ。』と言った事を批判して、『今とはいづれの文体をいふにや。唯常の書牘体をいふにや。但し近来世に流行する京伝馬琴などが作の絵草子などの体なるか。いとおぼつかなし。しかれども論者のこの論文を見るに、さやうの体とも見えず。却て近世には聞えぬ古語をも、をりをり見え、其上仮字も定家已来のかなづかひにもよらで、古きかなづかひによれるは、いともいとともいぶかしきことなり。』と矛盾を指摘している。

併し彼が平語の使用を主張したのも、無条件でなくて、限界をつけているのである。

歌は平語の精なるものにて、平語には入りくみて聞きとりかたきも、歌としらぶるときは、すらすらと聞えてかつは感ずるまでにも及ぶことに候。（丸山辰政が詠草に）

今の世にも聞ゆる事、又いふ事ならんには、万葉古今の頃なりとも、よるにまかせてよむべきなり。今の世にいはば上下通ぜぬ言葉などは、いと近き世の言なりとも言べからざることなり。（随所師説）

俗語といへど鄙言のことと思ふべからず、（中略）今の世のみやびたる詞の限を云ふべし（随聞随記）

とあるように、平語俗語と鄙言とを区別している。彼の主張した詞の平語俗語と言うのは、俗語の中で歌語として融けこむ事のできるもののみに限られるのである。古語でも現代の人にわかり易い詞は、大いに使用したがよいと言う意味なのである。言い換えれば、彼の今の世の詞と言うのは、当時の歌壇人の中に使い馴れ耳に親しまれている古語と、その古語に融けこむことのできる会話語の一部を指していたのである。この意味に解釈すれば、之も亦別に矛盾しているわけではない。

彼の説が断片的で、理路整然と統一的に論述されていないので、その真意を摑みにくいのであるが、景樹が詞の論の上でも、敢て強弁したものと見るのは当を得ないであろう。

彼の実作の和歌を見ると、少数ながら口語的発想の歌や平語を工夫して使用した歌が見られる。

朝な朝なおなじ所にきこゆれどあらたまりゆく鶯の声

春の野に若葉をつめば我ながら昔の人の心地こそすれ

夏の夜の月のかげなる桐の葉を落ちたるのかと思ひけるかな

右の歌の、おなじ所に、我ながら心地こそすれ、落ちたるのかと、の用語法に僅かながら口語的発想が見られるのである。

又、平語の使用に直接の関係はないが、新造語の使用にも工夫していたことが桂園一枝講義に見られる。

つたへきく遠山人の洞の内もかくこそあるらし今日の日長さ

おぼつかなおぼろおぼろと我妹子が垣根も見えぬ春の夜の月

に対する自歌自釈に於て、『遠山人新しきなり。おぼろおぼろと重ねたること古来なきなり。』と言って新造語の使用に得意になっている様子が見られる。

彼の平語の使用も新造語の工夫も、彼の論鋒の鋭い割には不徹底

ではあるが、彼の歌論としての平語使用の主張は、条件附と言う事が彼の歌論の中にはっきり記されている点から考えると、全く矛盾があると言う事はできないのである。

三

景樹の調の論と平語の説は矛盾はないにしても、詩歌の本質や美学的見地からすれば、必ずしも完璧とは言い難いであろう。彼は調は天地の心に通ずるから尊く美しくなければならないと考えたが、その美しいと言う事を、上品な優美なもののみに限定したのは如何なる原因によるのであろうか。又彼の平語の主張がやや不徹底で純然たる会話語の意味でなかった事は何故だろうかと言うことについて一応考えてみよう。彼は新学異見に次のように言っている。

抑ゝ歌の調は天地の中にはらまり運りて、しらずしらずその大御代大御代の風体をなすものなり。また人々の性のままにうけえたる調あり。そは各ゝ異にして其面のかはれるが如し。しか各ゝ異なりといへども、その大御代の風をば出るべからず

彼は歌の時代性という事に着目して、歌は時代の文化的特質に根ざしたものであるべき事を述べている。又歌の用語については、桂園一枝講義に

打わたす遠山本の垣根までおりいるものは桜なりけり

の自歌に対して、『遠山本といへば村里の気味合があるなり。歌をよむ人の上ではそれで通ずるなり。俗人には通ぜぬなり。』と言って一般人の通用語と歌壇人の通用語とはっきり区別しているのである。彼の言う平語俗語の論も、当時の知識人教養人の間に行なわれる用語、それも主として文章語としての普通語を考えていたものだろう。

彼は歌は時代性の表れたものであるから、現代の歌は現代性の表れたものでなければならないと考えたが、その現代性なるものは、彼が少年時代から呼吸して来た所の当時の歌壇の空気の匂ひ以外のものではなかったのである。永い間の伝統をうけついで来た堂上歌風と、伝統破壊の革新的歌風が混在したのが、当時の歌壇の空気であった。それが彼のいわゆる『大御代の風』なるものであったのである。その歌風なるものは、平安朝文化の色彩を持った貴族的趣味の優にやさしく上品で麗しい情趣だったのである。彼の意識せると せざるとに拘らず、古今集的歌風の基調に於て、清新の風を出すと言うのが、彼の真骨頂だったのである。

彼の調が上品で優美な美しさの枠内のものであり、彼の用語が平安朝的古語を基とした所の、当時の教養人間の通用語であった事も、この点にその原因があると言うことができるであろう。

四

次に景樹はその歌論に於て、歌は実物実景に向かって、端的な感をありのままに述べるべきものだと論じているが、その実作の和歌に於ては、知巧的趣向を主とした観念的和歌が数多く見られるし、理論的にもそれを自認していることの矛盾について考えてみよう。彼は新学異見に於て『歌はうたひ上る即ち感ずるもの也。かたぶきてその意を悟り、たづねてその調を識るものならんや。』又歌学提要には、『詠歌の趣向を求むることはあるまじき業なり。古歌のよ

きを見よ。何の趣向かある。顕輔卿の、秋風にただよふ雲のたえまよりもれ出づる月のかげのさやけさ、の歌何一つ思ひつきたる趣もなく、つねあるさまをいひたるのみ（中略）ただ実物実景に向ひて思ひたつままをすらすらとよみいでんには、おのづから調ととのひてめでたき調はいでくるものなり。』と言って、歌の趣向を排して、実感をありのままに表す写実的立場を主張している。彼の和歌の作品に於ては、実感を表したらしい写実的清新なものも数多く見られるし、桂園一枝や同拾遺にも、『事につき時にふれたる』と言う従来の歌集にない新しい部立を設ける等の点で、彼の趣向を排する歌論を実践したあとを伺うことができるのであるが、その反面知巧的な趣向を凝らした歌も数多く見られる。しかも彼はそれを自分でも秀歌として門人に示している所に矛盾が見られるのである。

桂園一枝講義に自作の歌の

山本に立てる煙も青柳の靡く方にと靡く春かな

について、自釈して『烟と柳をくみたるものなり。柳如烟と云ふ題もあるなり。此歌は烟が柳のまねをするなり。これが歌なり。』と言って、煙と柳を組み合わせた趣向について、これが歌の歌たる所以であると称して得意になっている。又同じ桂園一枝講義の中に、

年の緒も限りなればや白玉の霰乱れてものぞ悲しき

の歌について、『門人云、此歌大人自得の歌なり。』と記してある所を見ると、かような知巧的歌が、景樹の最も得意とする代表歌として、その門人たちも認めていたことがわかる。『秋風にただよふ雲の』と言う歌を推賞した景樹の論説と比較すれば、どうしても納得いかぬ事である。併し同じ桂園一枝講義の中に、次のような例も存在する。

小山田の苗代水は底すみて引くしめ縄のかげも見えつつ

の自作歌の講義に次のように言っている。『此歌平易なり。二三の人の評にとりのけよと言ひたれども、苗代の歌なき故出せり。実景なり。』自分で実景なりと説明しているように、これは実景の描写であって、彼の歌論のいわゆる趣向なき歌であるが、彼自身も平易なりと言っているし、門人も削除せよと進言した所を見ると、趣向なき実景の歌は秀作と考えていなかったことが伺われる。併し又考え方によれば、彼がこの歌を捨てかねて、歌集の中に選び入れた事から考えれば、やはり実景の歌にも愛着を感じていたことがわかるのである。又歌学提要に、掛詞は歌柄を賤しくして感じを傷うものであるから、好んで用いてはならないと論じて、その次に、

さはいへど云懸にもよき歌なきにもあらねば、ひたすらに之をすてよと言ふにはあらず、ただ心してものせんのみ。

と言っている。掛詞は原則的には排するけれども、使い方によっては生かされるから、注意して使用すればよい歌も出来ると、条件附の折衷論である。又彼の作品中にも掛詞を用いた歌が見られる。歌に趣向を求める事を斥けた彼の考え方も、此の程度の条件附折衷論だったかも知れない。

ここで、趣向を斥けると言う考え方と、歌はことわるものにあらずと言う考え方との間には、どんな関聯があるかについて、一応検討して置く必要がある。古今和歌集正義總論に於て、彼は漢詩と和歌を比較して、和歌は漢詩より優れていることを強調して、その理由として、

大和歌はもとより性情を述ぶるの外なく、思慮（おもんばかり）に渉るべきものならねば、其言はかなく其心をさなくして、言ふべき義もなく聞くべき理あることなけん。

と言って、更に漢土の詩には、義や理が表面に歌われているが、我が国の歌は、はかなき詞や幼い心の奥に、深い義や理が含まれているものだと言っている。又ことわりと言う語に『道理』と言う漢字を宛てていることもある。これによって考えてみると、彼の言う『ことわり』の内容は、主としてものの道理を指すのであろう。そこで作歌の際に擬人化したり、霰を白玉と見立てたり、雪を花と見ちがえたりするような、知巧的趣向による観念的表現は、『ことわる』ことの中には含まれないのであって、むしろ彼の言う所の、幼い心、はかなき詞、の中に入る事柄なのであろう。普通ならば、馬鹿馬鹿しいこと道理に合わぬ事を言うのが、和歌が文章や漢詩と異なる所で、かように幼き心をはかなき詞で表現した点に、面白みがあると言うのであろう。こう考えてくると、彼が趣向の歌を作った事は、彼の『歌はことわるものにあらず』と言う歌論とは必ずしも矛盾しないことがわかる。

併し彼の趣向を排して端的の感をありのままに述べよと唱道した歌論とは、やはり矛盾していると考えないわけにはいかない。これはどんな点にその原因があるのだろうかと考えて見るに、彼は古今集的歌風が身についているので、時により物にふれて感ずる第一印象としても、趣向的印象が端的に彼の心に浮んできて、彼自身としては、これも実感として疑わなかったのではなかろうか。彼の若い頃、伴蒿蹊が景樹の歌風を批評して、心に技巧を求めていると言った事について、景樹は、自分は少しも巧なく思うままに言い散らしているのに人が技巧的だと言うのは心外だ。と言って苦り切っていたということが、木下幸文の書簡中にあるそうである。（山本嘉将氏、香川景樹論）才分豊かな彼にとっては、知巧的な表現も、即座にすらすらとよどみなく心に浮んでくるために、端的な感じのように思われたものかも知れない。

五

景樹は新学異見を著して、賀茂真淵の新学の説を徹底的に攻撃しているが、その実景樹の歌論の調の説も誠の説も、真淵の提唱した説の継承に外ならないのである。又真淵の復古主義万葉主義を攻撃しているけれども、彼自身も亦対象こそ異なれ古今集を宗とした点に於て、古典準拠主義であると言うことができる。

真淵が新学に於て『いにしへの歌は調をもはらとせり。うたふものなればなり』と言っているのに対して、景樹は新学異見に於て、『往古の歌はおのづから調をなせりといふべし。意を用ひて調べなしたる物と思へるはいたくたがへる事なり』と攻撃しているが、真淵は歌意考に於ても『上つ代には人の心ひたぶるに直くなんありける(中略)言葉も直き常の語もて続くれば続くとも思はで続き調ふともなくて調はりけり』等と言っているように、意を用いて調べなしたと考えていたわけではないのである。この事は夙に景樹の門人も気がついたと見えて、門人の穂井田忠友が『忠友云、師の平日歌はことわるものにあらずしらぶるものなりと教へたまへると新学のはじめに古の歌は調をもはらとせりと云へるを討ちたまへると矛盾せ

るようにおぼえ侍り』と質問したのに対して、景樹は『是等の問に答居申候ては日暮申候事也。門に不入内は皆此難申候事すべて学者の通論也。御捨置可被成候』（桂園遺文）と苦しい答弁をしている。この問題に関する景樹の真淵攻撃はやはり当を得たものとは言われない。

ここで景樹の歌論の基づく所の系統について、検討してみることにする。自然誠実の説は、以前から各方面で行われて来た説であって、真淵の師の荷田春満にもまことの説があるので真淵は師の説をうけついだものと思われるが、太宰春台等の漢学者や、俳人鬼貫にも類似の説があるし、堂上歌学に於てすら鳥丸光広冷泉為村等によって唱えられている。景樹の言う誠の説はおそらくこれらの説を継承したのであろう。又景樹は若い頃万葉風の歌をしきりに詠んだと自分でも言っているし、万葉調の作品も彼の歌集の中に見られる事から考えると、彼自身意識せるとせざるとに拘らず、真淵の歌論の影響を受けただろう事は疑をいれない所である。景樹の調の論もその実真淵の説いた調の説をとり入れて、その上に、漢学の古学派の説などによって、調の内容に新しい意味を附け加えたものと思われる。漢学に於ては、宇佐美喜三八氏も指摘しておられるように古学派の系統に属するので、（国語と国文学・昭三十二年十二月号）古学派の説く所の、文学は人情を述べたもので古今東西相通ずると言う考え方の影響をうけて、調が古今東西天地の心に通ずるの論を樹立したものと思われる。又景樹は小沢蘆庵の指導を受け、蘆庵には心服していたようであるから、蘆庵の歌論を継承して、蘆庵の同情の説の『情』の代りに『調』を置き代えても景樹のいわゆる調は万物相通ずるの説は成立するわけである。又景樹の実物実情を平語で表現するの論は、蘆庵の『ただごと歌』の展開であろう。

こう考えてくると、景樹の歌論はすべて従来の先輩諸歌人学者の説を集成したものと言うことができる。然るに歌を専門として世に立ち、多くの門人を率いて一派をなしている景樹にとって、自分の説が江戸の真淵の説の模倣だなどと思われたくはないだろうし、曽て『筆のさが』によって縣門一派にたたかれた事も忘れられない事であっただろう。覇気の多い自信の強い性格も手伝って、新学異見を書いて真淵を攻撃したものかも知れない。併しこれ等の事情はともかくとして、両者の相容れない根本理由は、万葉主義と古今主義という事にある。景樹の和歌は結局古今集の歌風なのであって、彼の歌論も古今集趣味の枠中のものだと考えて初めて理解出来る性質のものなのである。当時は因襲的歌道に対する革新の風が全国に広がりつつあったとはいえ、京都にあっては平安朝時代の文化的教養が、当時の歌壇人の常識となっていたのである。当時の歌壇に於ては、新古今集以後の中世の因襲的歌風からは脱却しても、古今集的趣味は歌壇人の間に滲透していたのである。景樹がその実作に於ても、歌論に於ても、結局古今集の枠の中から出る事ができなかった事は、蘆庵の説を継承したと言うことだけではなくて、彼にとっては古今集的趣味は古今に通ずる基本的歌風であって、当時の現代的『大御代の風』ですらあったものと思われる。景樹が真淵の復古主義を非難し、尚今主義を唱えたに拘らず、結果的には自分も古今集を宗とする古典準拠主義になってしまっている矛盾も、ここにその原因があると思われるのである。彼の和歌も理論も革新的なもので

はあったけれども、当時流行の歌壇の色彩から全く脱却したものではなかった。景樹が多くの門下生を擁し、桂園一派が全国に勢力を張るほど、世人に受け容れられたのも此の点にあるし、又一方に於ては、桂園派が後には堂上派と同じような因襲的歌風に堕して行った事も亦、この点にその原因があったという事ができる。彼の歌風が当時の歌壇の流風たる古今集的なものであった為に、当時の人々に親しまれ、うけ入れられ易かったのであろうし、又その中に清新な革新的匂ひがあった事は、新鮮な魅力を与えたことであろう。桂園派の勢力が増大した理由はこの点にあったと思われる。一面に於て、彼の歌論は尚今主義であったので、現代を尚ぶと言う点で、当時の文化的潮流の枠の中にあったのであるが、この現状に親しむという点で、却て保守的傾向を包含していると見る事ができる。この事が後世桂園派が保守的因襲的歌風に堕して行った根本原因となっていると見る事が出来るのである。これに反して景樹の攻撃した真淵は、古代を尚び万葉集を宗としたので、当時の歌壇の風に染まった人々にとっては、餘り古く遠い時代の文化だから、耳馴れない親しみ難いものに感じられたであろう。真淵の万葉風の歌風を継承した門弟は一部の人々に限られていて、その人々も主として当時の歌壇と深い交渉を持たないような人々であった。真淵の門弟の中で、当時の歌壇に活躍した村田春海や加藤千蔭又は本居宣長及びその門流等は、真淵の万葉風を継承しないで、古今集乃至新古今集的歌風に赴いた事実からも、此の事がわかるのである。真淵の万葉主義が、学問的にはともかくとして、作歌の方面では景樹ほど当時の人に容れられなかった点が、考え方によれば却て革新的性格が強かったと見ることができるのである。文化の革新は、外来文化の流入を通じて行われることもあるし、又古代文化の復興の形が行われることもある。現状に不満を感ずる者が、空間的に遠い外国の文化を求めるのも、又時間的に遠い古代の文化にあこがれるのも、現実よりかけ離れた遠い彼方のものを求めると言う点では同様だからである。かような意味に於て、復古思想の真淵がより革新的であり、尚今主義の景樹がより保守的だという結果になったと言っても、必ずしも逆説的言辞ではないであろう。

以上述べてきた如くに、景樹はその和歌の詠作については、当時の歌壇の一般的潮流であった所の平安朝的歌風を基として、それに革新的色彩を加えて、清新な自己の歌風を樹立した。そこで堂上一派の歌風から脱して、新古今集以後の中世の伝統的歌風を斥け、古今集まで遡ったのである。又彼の歌論の方は、小沢蘆庵の論を主流として、その他の各般の従来の歌論を集成し、更に調の説を以てその中心として、自己の歌論を形成したのであるが、彼にとっては作歌が先で、歌論はその作風を理論づけるためのものであった。芸術家肌の性格で学者的でなかった彼は集成した理論を充分混融して整然たる学理に統一するには、やや不徹底の点も見られるし、覇気の強い才人肌の性格から、時には勇み足の理論を吐き散らす事もあっただろう。そのため諸所に破綻らしい点も見られて、矛盾を感ぜしめるのであるが、仔細に考えてみると、必ずしも矛盾した理論のみとは言われないのである。彼自身としては、自家撞着を感じていたのではなく、確信を持っていたものと思われるのである。